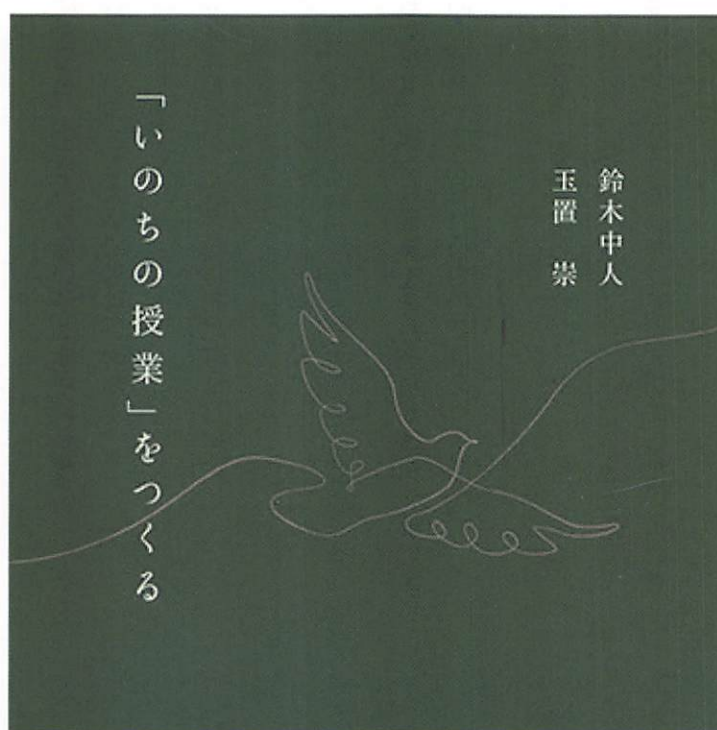


生きる幸せをみつめる

いのちびと

いのちをバトンタッチする会



もしも自分なら、どうするだろうか？

大切だと思っていることを心から大切だと思わせることこそ、実はとても難しい。

その大切さはわかっているけど、授業にする自信はない――。

そんなあなたにこそ、読んで欲しい。

「教師として」のその前に、ご自身に問いかけながら読んでください。

30万人以上が参加した、涙した
心揺さぶる感動の授業！

春さくら社

- 2 いのちの言葉
- 3 この人 ～ 玉置 崇、鈴木 中人
- 6 心に響く「いのちの話」 ～ 山本 恵子
- 7 私の思い ～ 石川 雅春
- 8 いのちの便り
- 9 いのちの授業 ～ あの日から
- 10 お知らせ
- 11 いのち いきいきコーナー 安井さんファミリー

No. 47
2022.9

「いのちの授業」をつくる！
学校、社会に広げたい



『いのちの授業』の実践者・鈴木中人、授業づくり＆学校経営の達人・玉置崇。体験も視点も違う二人が、新刊本『『いのちの授業』をつくる』を上梓。その歩みと思いとは？

二人で、「いのちの授業」の実践を重ね続ける（教師向セミナーにて）

いのちの授業

二〇一三年八月、愛知県小牧市立小牧中学校で「いのちの授業」が開催された。企画した中学校長（当時）の玉置崇は言う。

「はじめ、自殺のニュースが増えていました。そこで、保護者も巻き込み、親子で『いのちの大切さ』の講演を聴くことにしたのです」

「実は、あまり効果があるとは期待していませんでした。大規模校のため会場は市民会館大ホール。生徒は聴くだけ。静かにしてくれていればとさえ思っていました」

講師の鈴木中人は、実体験Ⅱ六歳までのいのちを精いっぱい輝かせた少女と家族の姿と思いを淡々と語った。

「講演が始まると空気が一変。生徒は、景子ちゃんの生き様から『いのちの大切さ』を自分なりに感じ取る。保護者は、目頭を押さえて『子どもと自分は生きている』幸せを実感していました」

「講演の最後、『絶対に親より早く死んではいけない！』との鈴木さんの魂の叫びに、全員の体が硬直です。まさに『いのちの授業』と

感じました」

「『いのちの授業』をきっかけに、教師にも大きな変化が生まれた。

「K教諭が、『中学生は助けられる人より助ける人』になってほしいと、消防署などと調整して生徒にAED研修を開催してくれたのです。T教諭は、図書館に四百冊の『いのちの本』コーナーを設置。生徒は感想を校長室に話しにきてくれました」

「『いのちの授業』は本当にやりづらいものです。いのちが大切でないという子どもはいません。大切だと思っていることを、心底から大切だと思わせることこそ難しいのです。教師は、授業指導案などをなぞるような授業をついしがちです。私もそうでした」

「鈴木さんとの出会いは衝撃でした。教師が思いを一方的に押し付けてはいけません。子どもの『生きている喜び』『いのちの大切さ』を自らが感じ取ろうとする気持ちを持たせること。それが『いのちの授業』の極意だと気づいたのです」

玉置は、そうした学校のことを鈴木に伝えた。鈴木は言う。

「驚きました。講演後も、学校で

のことを何度も連絡してくれる校長先生は初めてでした。しかも見方や実践が実に広くて深い。『この校長先生は、本当に凄い!』と感服です。それから私が主宰するセミナーなどにもお招きするなど、いのちの出会いとなりました」

その後、玉置は岐阜聖徳学園大学教育学部教授となり、授業づくり・学校経営の達人として全国に知られるようになった。

いのちのプロジェクト

二〇一五年、「小児がんを知りいのちの大切さを学校で学ぼう」プロジェクトに取組んだ。鈴木は言う。

「いのちの授業を初めた二〇〇五年当時、学校現場では『がんはタブー』でした。でも、がんは国民病、小児がんの子どもにとって学校は生きる力、小児がんを通じて難病への支援・理解にもつながる。

がん教育が全国で始まることもあり、小児がんを題材に、いのちの授業となる副教材を制作して、全国の学校に届けることにしたので。もちろん、一番に玉置さん

に声をかけました」

玉置、鈴木、中学校長、養護教諭、小児がん専門医、映画監督が集い、授業指導案・授業DVD・副教材を制作。全国教育委員会や学校に二万部を届けた。

その中で、玉置は「いのちの授業」への思いも鈴木に語った。

「若い私は体当たり教師で、校舎壁面に『玉置、死ね』と書かれたことも。家庭環境に恵まれない教え子がいました。中学卒業後、居酒屋に就職。『先生に、僕が初めてさばいた刺身を食べてほしい』と来てくれ、涙があふれました。数年後、彼はバイク事故で亡くなりました。

笑顔も学びの楽しさもある授業、学校づくりを試行錯誤してきました。私自身も病気になり、もう教壇に立てないと覚悟したこともあり。だからこそ、子どもたちが『生きる』『いのち』に向き合ってほしいのです」

二〇一九年、二人は、「いのちとがん・小児がんを学ぶ本を学校に届けよう」プロジェクトにも取り組んだ。

子ども自身が読める、「いのち

の本」を出版して、全国の学校に届けるものである。

「子どものための『いのちの授業』（致知出版社）」を、約三千冊を献本。二人でこの本を活用した模擬授業セミナーも、東京・愛知・京都で開催した。

みんな、悩んでいる

鈴木は千校を超える学校を訪問し、「いのちの授業」の参加者は三十万人を超えた。

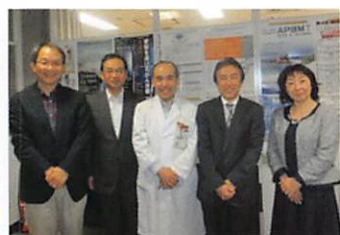
多くの子どもたち、教師、家族と出会い、ある思いを強くした。

「子どもたちに、いのちを大切にしてほしい! そう願って、たくさんの方々が『いのちの授業』に組んでいます。

現実の中で、戸惑い、悩み、壁にもぶつかってもいます。

子どもの心はどうなっているのか。いのちの大切さをどう伝えたらいいか。忙しい、やっても変わらない、空しくなる。学校だけでは解決できない壁がある。みんなはどうしているのだろうか…。

いじめ、自殺、虐待、凶悪犯罪、生きる実感の喪失、孤独化…。子



がん教育
プロジェクトメンバー

どもたちは、いのちの危機の中にいます。

その解決策はある。心に響く『いのちの授業』の実践ヒントもある。『いのちの授業』を広げてほしい。その思いを本にしよう!

まず、「いのちの授業」について現場の生の声アンケートをした。全国の二百名を超える教育関係者から「いのちの志」が届いた。

「みんな同じ思い。その思いに答えねばと心が熱くなりました」

コロナ禍の中、約一年かけて教師の本として原稿を書いた。そして、A編集長に読んでもらった。

「大学での講義レベルですね。読者のすそ野を広げる、子どもにも読める方向で考えてみても良いのでは?」との感想だった。確かに読まれてこそ本である。

そこで、子ども向けに仕立て直し



新刊本
『いのちの授業』をつくる

て原稿をB社に届けた。「重版が見込めません。条件付きであれば協力できますが…」とのことだった。友人のベストセラー作家に相談すると、

「同じ眼差しでは、結果も同じ。これまでにない企画を考える方が、授業も広がるよ」と言われた。出版社に迷惑はかけられない。新企画を考えることにした。

二〇二一年四月、鈴木と玉置で「いのちの授業」は何のために、何をすべきかを考えるセミナーを開催した(三回シリーズ)。同じテーマで二人がミニ講演をした後、玉置ゼミの大学生と語り合った。鈴木は言う。

「大発見でした。『いのちの授業』の実践者と教師・校長体験者。体験も視点も違うからこそ、より深く広く、実践的で心に響くメッセージになるんです」

「二人の共著で、いのちの本にしようと思いました。でも、玉置さんは超多忙。さらに原稿を書いても出版できなければ無駄骨に…。無理だろうなあと思うつつメールしてみました」

数日後、玉置から返事が届いた。「嬉しいお誘いに感謝です。今の時代にこそ必要な本です。ぜひやりましょう!」

広げよう!いのちの授業

まず二人で本づくりの方向性を話し合った。

教師向に、学校現場で活かせるように、現場の生の声に答えるものにする。具体的には、次の四つの柱を立てた。「いのちの授業」づくりの見方考え方、現場の悩みへのQ&A、実践ヒント、子どもへのメッセージ。それぞれで原稿を書いては、相談を重ねた。

三か月後、玉置より提案があった。「内容はある程度固まりました。ユニークな企画だから、出版社で読んでもらうてはどうかでしょうか。私の方で出版社を探してみます」一週間後、教育専門書のさくら

社(東京)の横山駿也社長、良知令子副社長とオンライン会議となった。率直に感想をもらった。

「原稿の出来映えは、教育書として五十点です。でも、とても感動的、類似本が見当たらないユニークで大切な企画です。ぜひ一緒にやりましょう」

その後、原稿の全体構成、事例などの深掘り、表現方法など、一言一句まで見直した。

二〇二二年七月末、ついに本として仕上がった。

「いのちの授業」をつくる。鈴木中人・玉置崇著、さくら社、約二百ページ、九月上梓。

内容は、「いのちの授業」とは何をどのように学ばか!根本の見方・考え方を考える(第一章)。明日に向かって、子どもたちに伝えたい「いのちのメッセージ」二十の話材集(第二章)と、その授業づくり役に役立つ実践ヒント(第三章)を提案。日々の学校現場で起こっている、教師が抱える「いのちの悩み」にも答える(第四章)。

鈴木と玉置が言う。

「二人が、泥臭く多面的に『いのちの授業』をみつめました。その

対話と深掘りから、新たな提案、ヒント、気づきが生まれたのではないかと思います。

エピソードは、いのちの実話です。たくさん『いのちの物語』に出会います。『もしも自分なら、どうするだろうか』と問いかけてください。きっと、あなたの心を優しく確かなものにしてくれます。家庭や地域でも読めます」

さらに、「広げよう!いのちの授業」プロジェクトにも取り組む。

学校現場で「いのちの授業」がより推進されることを願い、全国の教育委員会や学校などに本書を献本(目標一五〇冊)する。趣旨文・講演録・授業DVDも同封、特別価格での斡旋、寄付の募集も十一月末まで行う。

趣旨文の一節を紹介する。

「みなさまのお力を賜り、『いのちの授業』を通じて、未来を託す子どもたちの『生きる力』を育み、その輪を社会に広げていただきたく心よりお願い申し上げます」

鈴木中人。いのちをバトンタッチする会代表。全国で「いのちの授業」に取組む。玉置崇。岐阜聖徳学園大学教授。授業づくり、学校経営の達人として知られる。